

文子

○ほうたるは熱くないのよ初江さん

半夏生階下の夫の溜息よ

女学生二人川に足つけ梅雨晴間



酔花

事もなし蜥蜴の尻尾で遊ぶ猫  
億光年写したる空蜥蜴の背  
光る君古代に連れてけ瑠璃蜥蜴

みどり

農子

一画の夕日の差した半夏生

炎天の茅の葉走る青蜥蜴

慰霊日のおばあ涙若きの詩

○青春と五月の駅で乗り合わせ  
どくだみを刈りて母の忌を迎え  
緑の帽子さつとかぶりて草仲間

秀美

えり

○廃校の門かじりをり鬼やんま

竹林寺濡れて朱塔や半夏生

賽銭の音かぎわけて老蜥蜴

○背泳ぎの疑ひ深き手先かな  
○半夏雨烏賊の天ぶら爆ぜる音  
○厨の灯ともして半夏雨と知る

とも

初江

老猫に昔の動き蜥蜴出る

念入りに顔洗う猫半夏雨

実梅漬け少し明るさ取り戻す

志津子

○話尽きストロー回しソーダ水

梅雨晴や水恋鳥が彼方から

若き日の母の形見や白日傘

花樽板垣真似て枝伸ばす  
梅雨晴間お堀の鯉や金一つ  
柴犬やバイクの荷台半夏生

美貴

○小走りが得意なんです蜥蜴の子

梅雨晴れの雨天兼用黒日傘

にんどうの花の香りをはこぶ風

一枝

○青蜥蜴余生の道をすりぬける

荷をほどけば故郷の香新茶の香

半夏生独り暮しの夕心

瑞枝

清流の濁り止まずよ半夏生

庭掃除右往左往の吾と蜥蜴

饒舌を誘ひ出したる団扇かな

富子

根気よくベーススイング半夏の日

蜥蜴色纏いて吾は米を研ぐ

雲隠れしたい日もあり白ウツギ

郁子

半夏生白く葉を染めおしやれかな

どくだみや大地の隙間埋め尽くし

雷の暴れ刺激をもらひけり

千代

○へばりつく蜥蜴その石うちの墓

○半夏生揺れて沼風真珠色

雨音に昼のサイレン半夏生

味元 昭次 作品

半夏生遠い記憶の姉のように  
AIは蜥蜴の悲哀まで知らず  
山里の蜥蜴一匹見たるのみ

★次回市民句会

【開催日時】

令和五年七月二十六日(水)

午後一時十五分〜午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます

